

室生犀星『大陸の琴』の世界

中西 達治

はじめに

『大陸の琴』は、昭和十二年（一九三七）十月十日から十二月十日まで、朝日新聞に連載された。連載回数は全六十一回、「移花」（一〜十）「楊柳の都」（一〜九）「白夜」（一〜十四）「乳房火山」（一〜十四）の五章からなり、毎回「兄弟の帆」（「移花」一）のように題名が付されている。連載完結後、翌年二月に単行本として出版された。出版に際しては、詩篇が追加されている。一般に入手しやすいのはこの単行本であり、新潮社版全集などもこれによっているが、あとにもふれるように、その作品は、単行本化する際作品の根幹にかかわる改訂がなされているので、ここでは、新聞に連載された際の展開を元に、作品を見てゆくことにする。なお、定本には朝日新聞縮小版を用い、適宜新潮社版全集、他の単行本を参看し、その場合には、その旨を注記した。

一 十月十日に先立って、十月六日朝刊に、新聞連載開始にあたっての新聞社と作者それぞれの、読者にあてたメッセージが掲載されている。新聞社は、

新朝刊小説

武田麟太郎氏作「風速五十メートル」は近日の紙上をもつて終

結しますが、代つて登場するはさきに本紙の夕刊中篇小説「聖処女」をもつて、圧倒的に読者の好評をかち獲た室生犀星氏であり、新興楽土の裏と表に息づく生活の行く手を見つめた、まことに室生氏独特の取材になるもの、題して『大陸の琴』これに配するに挿画には「三家庭」「緑の地平線」の挿画によつて、つとのお馴染の宮本三郎画伯。事変の渦中にある現在、もつとも推奨し得る小説たることを信じて疑ひません。

という。これに対して、

作者の言葉
この物語の背景や接近聯想は、悉く満洲の美しい風光のなかに選んだ。私が作家となつてはじめて試みた作品なのである。作者は常に可憐掬すべき人生のいろいろなものを搜し廻つてゐるうち、或る一方の捌け口がついたと同時に満洲の野に突然投げ出されたのである。

もともと荒唐無稽な人生を描くべく約束された私は、満洲にある都会の街や小路や悲しい無限の荒野のなかにぼつりぼつりと主要人物の徳義や愛憐の姿を見付け、もろともに運命的臭気を描きはじめたものが本篇なのである。故に本篇は華麗莊嚴なる恋愛交響楽でもないし近代人情の絵巻物でもないのである。小説の

役目は畜に一つしかなく運命それ自身を食ひ散らすか育てるかしないのであらう。私は敢て本篇にそれを試みようとした。というのが犀星の抱負である。

「舞台を楊柳立ちならぶ満洲の天地にとり、新興楽土の裏と表に息づく生活の行く手を見つめた、まことに室生氏独特の取材になるもの」という新聞社の期待した内容と、「満洲にある都会都会の街や小路や悲しい無限の荒野のなかにぼつりぼつりと主要人物の徳義や愛憐の姿を見付け、もろともに運命的臭気を描きはじめたもの」という自作の解説の両方にある、満洲という風土にかかわるという点がどのように作品に写し出されているのか、とりあえずは、作品の内容を整理しておくことにする。

三

第一章「移花」。全ては「春先」(「移花」一「兄弟の帆」)神戸から大連に向かう「春蘭けた黄海の日光」(同五「隊長」)に照らされた船中から始まった。その船に乗り合わせた一等船客の白崎藍子、石上讓、兵頭鑑、大馬専太郎、宝田欣三と、三等船客の庄屋力三、早瀬苺子らの織りなす人間模様が、以後初雪の二、三ヶ月後まで、大連、奉天、哈爾濱を舞台に展開される。

「変挺な日本語を」あやつる、「白癡のやうな奇妙な美しさ」のある白崎藍子は、満洲焼けのある宝田欣三によって、最初に見かけたときから十五年くらい、「事変の時にはまだこればかりのお嬢さん」と話しかけられる。その宝田は、娼婦の仲買を生業とする三等船客の庄屋によって哈爾濱のセックスショップの経営者であることが明かされる。久しぶりにあった藍子にひかれて、同じ船に乗ってしまった石上は彼女の縁戚で東京の高官の子弟、元デパートの食堂につとめていたが満洲の兄の店を手伝うために渡満する苺子、彼女は過去に、大馬とかなかな繋がりがあった。「大連を振り出しに国境あたりまでうろつ

かう」という大馬は、第二章の庄屋の独白に、「測量師かそれとも軍人かな：中略：ひよつとするとあれかな、あれらしいなあ。」(同七「あれかな」といわれる人物である。この時代、一等と三等の差は、よほどのことがない限り、乗客の社会的地位、身分ひいては教養までも規定している。三等船客は一等船客のいるスペースに立ち入ることは許されていない。庄屋と苺子の関係は、一等船客と三等船客との間をつなぐために、周到に用意されている。大馬を媒介にして初めて、苺子は藍子とつながる。そしてまた、庄屋の一言が、一等船客の宝田を、庄屋のレベルまで引き下ろす。登場人物相互の関係が、こうして明示されたのである。ところで、その庄屋は、同じ三等船客の早瀬苺子に何となく惹かれるものを感じている。庄屋は、自分の境遇相応の相手を見つけたというわけである。哀愁を帯びた兵頭鑑は、十年前にいた奉天を尋ねるといふ。彼らのうち、白崎藍子、宝田欣三、庄屋力三ら三人は、現在哈爾濱在住もしくは哈爾濱を根拠に活動しており、不思議な人物とされる大馬専太郎も、当時の感覚でいえば満洲浪人という雰囲気を持ち、満洲に縁がある。いわば彼らは、満洲に「帰る」のである。一方兵頭鑑、石上讓、早瀬苺子の三人は、目的はともあれ満洲への旅行者である。満洲という植民地をめぐる日本人の、先住者と移住者ないしは旅行者とが、一堂に会し、「日本ではもう若葉を着けてゐる季節なのに：中略：楊柳の芽が萌え出したばかり」(「楊柳の都」一「埃の虹」)の大連到着と同時にそれぞれの道を歩み始めたのである。

四

第二章「楊柳の都」は、苺子の働く大連の食堂を接点にして、見えるヒロイン藍子の影響下にある石上、その石上絡みで、藍子とつながる庄屋と大馬がそれぞれ彼女と関わる。「大陸の初夏」の大連(同二「鴉片」、藍子にすぎなくあしらわれ哈爾濱を飛び出した石上が苺

子の店を訪れ彼女に言い寄る。彼は、アヘン中毒になっており、店を出た後アヘン窟に行く。大馬が石上と再会したとき、彼は、すっかり落魄していた。いつの間にか出会いから三ヶ月以上の月日が経過している。（同五「被去坊」）彼は、大陸に渡った日本人のある種のタイプを表しているといえる。その数日後、今度は庄屋が大馬と出会う。庄屋は、哈爾濱の藍子から石上の行方を捜してくれと頼まれている。大馬は庄屋から葎子の店を聞き出す。庄屋は大馬に彼女を愛しているといい、彼女に手を出さなという。大馬が葎子に会う直前、石上は彼女に五十円を借りていた。大馬は、葎子に庄屋とのいきさつを話す。彼女は、「ここにゐてはしまひに庄屋のためにどうかされさうな気がする」、藍子を頼って哈爾濱に行くと言った。（同七「烟火中」、八「雀色時」、九「めぐりあひ」）葎子との関係で大馬を意識する庄屋、庄屋を気にして藍子のもとにゆこうとする葎子、庄屋を牽制しつつ内心で藍子を意識している大馬、狂言廻しの石上を間に置いて、舞台は大連から哈爾濱に移動する。

五

第三章「白夜」。真夏の奉天は、前章の大連の物語に登場しなかった憂愁の人、兵頭の過去を現在と結ぶ場所である。

「途方もない明るい夏の日光」に照らされた奉天で、兵頭は我善堂という孤児院を訪ねた。彼は、十年前の一九二七年夏の夕方、満洲人の少女との間に出来た子供を少女の父親に金を渡し、ここに捨てたというのである。（「白夜」一「嬰兒」）兵頭が孤児院に関心を持っているらしいことは、すでに大馬によって語られていた。彼は大連でも、孤児院を訪ねていたのだ。（「楊柳の都」六「三猿中一猿図」）何度も我善堂を訪れるが、どこにも十年前の八月六日に嬰兒をあずかったという記録はなかった。

ここで、兵頭の経歴が明らかになる。彼は、奉天の医局員だったが、

この事件以後日本に帰り、翌年郷里の土地財産を売り払ってドイツに留学、三十年帰国して病院経営に成功、この間独身のまま貧兒育成会を立ち上げ、貧民の子女の育成事業に尽力してきたというのである。

子供と母親を捜して奉天中を歩き回っていたさなかに彼は「小盗児市場」で、かっぱらった時計を売ろうとしていた石上に会う。（「白夜」四「偽れる夕暮」）なにがしかの金を渡してホテルに帰った兵頭の前に、昨夜このホテルに着いたという大馬が現れた。兵頭は、彼に自分の過去を打ち明ける。会話の中で大馬の職業が何かを確信しているという兵頭に、大馬は、これ以上自分の仕事のことを尋ねたら二度と会わないと釘を刺す。恥ずべき過去を持つ兵頭と秘密の経歴を有する大馬、そんな二人の間で話題になったのは、藍子を巡るお互いの気持ちであった。（同十「瘡」）

兵頭の今回の旅は、成功した兵頭の贖罪、再生の旅だったことが明らかにされ、前章の、葎子を巡る男達のやりとりを引き続いて、藍子を巡る男達の関係が明らかになる。

兵頭は我善堂の事務員から、事情を詳しく知りたければ、哈爾濱のロスキイ・ドムを訪ねなさいと勧められていた。彼もまた哈爾濱へと志すことになったのである。哈爾濱への満鉄車内には宝田がいた。問わず語りに宝田が語るところによれば、藍子は「お父様といふ方は恩給生活者でありお母様といふ人も手固い方なんです。」だが、彼女は「そういう家庭に不似合な贅沢をしてゐられる」。あの物腰には、男のバトロンのいる雰囲気があると彼はいう。藍子の微妙な生活が、もう一人の哈爾濱在住者宝田によって暴かれてゆく。だが兵頭は、二度と彼女のことを話題にするなど宝田に迫る。（同十二「哈爾濱へ」）彼女の話題を封印したのだ。ここには、藍子について第三者の目を拒絶する兵頭の心情がしめされている。哈爾濱に着いた翌日、兵頭は、ヒゲラシの鳴くなか（本文には、「けふは旗日らしく道路の向側にある満

洲中央銀行の牛乳色の建物に日満両国の旗が出てゐて、」とある。ちなみに、一九三七年当時満洲帝国において規定されていた国家的祝祭日には、該当する可能性があるものとしては、「祀孔」陰暦八月上丁日、「中秋節」同八月十五日、「祀閩岳」八月秋分後第一戌の日、「孔誕」同八月二十七日があるが、どれであるかは不明である。^{註1} いずれにしても、太陽暦に換算すれば、九月下旬になることは間違いない。) 哈爾濱の孤兒院、ロスキイ・ドムを訪れるが、そこは日系の孤兒院は一度も収容したことがないといわれる。兵頭の捨て子捜しの旅は徒労に終わったのである。(同十四「運命の臭気」)

六

第四章「乳房火山」。(単行本化された際「五つの国の旗」と改題。) 哈爾濱の物語、第一部は藍子の物語である。これまで第三者によって断片的に語られていた藍子の生き方が、明らかにされる。藍子を頼って大連を逃げた苺子を追って庄屋も、哈爾濱にきた。彼女の居所を聞き出そうと藍子を探していた彼は、哈爾濱に來てから一週間めの夜、藍子を見つけるが、彼女には同伴者がいた。二人はヤマトホテルに投宿した。庄屋は宿帳を確かめ相手の男が麴大三であることを知った。自分もここに一泊することにしてフロントに立っていると、そこに現れたのは石上である。狼狽する石上、乞食同然の暮らしをしていた彼は、三週間前、庄屋と警察の協力で大連から日本に送り返されていたのに、また藍子のいる哈爾濱に舞い戻ってきたのである。藍子が麴と同室していると聞いた石上は、部屋に入り込み麴との関係をとらえて「淫売」と藍子をなじるが、麴が部屋に戻ってきたため外に出た。その藍子に、麴は、「あいつにあぶらを取られたね。」といった。(「乳房火山」五「炯眼」、六「蛆」) 石上が去った二人の部屋を今度は庄屋が訪ねる。苺子のことを聞きたいという庄屋に麴は、藍子が知らないといっていると伝える。庄屋に「こちらがご主人の麴さんでしたか。」

といわれた麴の顔色は、「食塩のやうに」変わった。麴は藍子の男関係を問い詰めるが逆に彼女に、逮捕されても知らないと逆襲されて愕然となる。麴がホテルを出たあと、彼女は、ホテルモデルンに、大馬を訪ねた。(同九「不世出の別嬪」、十「深夜の客」) 再会した彼女に大馬は、日本に行かない理由を問う。話の中で彼は、藍子の父親が違ふことを確かめる。(「哈爾濱」三「顔を見せて下さい」) には、藍子が兵頭に向かって、大馬に「混血児ぢやないか」といわれたと告げている。大馬に愛されていることをしりつつ彼女は、自分のぼろはあちこちで表れているといって立ち去った。(「乳房火山」十一「ポロ」) 家に戻ると苺子が麴の来ていることを伝える。謝りに来たという麴に、藍子はもう元には戻れないという。麴は諦めて銀行預金の通帳と印鑑を彼女に渡し、捕まっても何も口外しないといい、初雪の降るなか彼女の家を出て行った。(同十四「はつゆき」) 麴の愛人としか見えないうらましい。彼女を悪女としてみている石上、麴に対して、彼女に聖性を見ている兵頭、これまでの物語が、ここで一つにまとまってきたということである。

七

第五章「哈爾濱」は大団円、兵頭と藍子の恋の成就とともに、登場人物全てに、人生の指針が与えられている。兵頭が、宝田の店を訪ねる。ちょうどその時、庄屋もそこに來た。話の中で庄屋は、麴が二、三ヶ月前に官憲に捕らえられたという。藍子と麴との関係を兵頭は知らなかった。夜、店を出た二人は、車で藍子の家に行く。いよいよ最終章、全ては藍子の家の場面に収斂してゆく。兵頭の前で藍子は、率直に自分と麴との関係を説明、兵頭は自分の過去の過ちを告白する。庄屋とともに戻ってきたアヘン吸引で廃人同様の狂気に捕らえられた石上は、藍子を淫売となじり、藍子に惹かれていた兵頭、苺子に惚れ

ている庄屋をも罵倒し、「ハ爾濱」七「あぶらむし」絶望して部屋を出て行った。庄屋は、母に今後はまっとうな生き方をするから自分と一緒に来てくれと懇願するが、彼女は日本に帰るといつて断る。（同八「わかれ」）ここで、制度外に生きる男との関係を清算し、兵頭（同八「わかれ」）の愛を受け入れるブライドの高い女と、最下層に近い生き方をしながらも自己を守り続けて日本に帰る女という対照的な二人の女の生き方が示された訳である。注

こうして物語は終わりを迎える。室外は零下四十度の真冬、少年ヴァイオリニストの演奏会に出かけた兵頭と藍子は、大馬と再会する。石上も来ていたようだ。「藍子はなほも人と人との間に石上の姿を見ようとしてゐた。一生涯に自分は何人かの男を精神的に叩き潰したことを思ひ返した。」（同十「いけにへの男」）大馬は、兵頭の藍子に対する気持ちを汲んで、身を引くことを決心した。「この女はうんとどやしつけなければいけませんよ。」彼は彼女の持つ無意識の驕慢をとらえて兵頭にいった。（同十三「天青地白」）三人は零下四十度の表通りに出た。明日チチハルに出発するといつて大馬は、姿を消した。二人きりになったとき、兵頭はいう。

「僕と内地に行つてみませんか。ハ爾濱を離れるとあなたはずつと良い人になりますよ。あなたはまだこどもですからね。僕がいろいろ教へて上げます。」（同十四「統天青地白」）

そして、「二週間の後、彼等は日本に向つて出立して行つた。」といふのが、全編の結びである。

八

ドラマの主要な登場人物の全てを大連航路の汽船という閉鎖空間に結集させ、彼等を満洲という異郷の空間に解き放つ。春たけなわの大連から、極寒のハ爾濱まで、舞台を移動して彼等は、それぞれ交錯し合いながら生の軌跡を描き続ける。船中での微妙なふれあいのなかで

明かされた、ハ爾濱で麴大三という得体の知れない人物をパトロンとして生きる混血（日ロ混血を暗示する。）美貌の藍子、対するに十年前、中国人女性との間に出来た我が子を我善堂に捨てた兵頭、日本政府の秘密任務に就いている大馬、二人のかげのある男性が彼女を巡って競い合う。さらに藍子には、親戚筋の石上讓も絡んでいる。藍子は、中流以上の教養がありながら男を手玉に取る悪女のイメージで読者を引きつける。いっぽう、セックスショップを営む田欣三、そして娼婦となる女性の売買の仲介をする庄屋力三という、負の世界につながる男達が登場する。そこに食堂の給仕であるが純情な早瀬母子が絡む。彼女は、大馬の旧知であり、大馬にこころを寄せているが、大馬にはそういう意識はない。そういう彼女を恋してしまったのが庄屋である。そして全体の事件の狂言廻しになるのは、アヘン吸引者になってうろつく石上である。これらに、薄幸の白系ロシア人女性達、当時有名だった亡命ロシア人バイオリニストの演奏会などを点綴、ヤマトホテルのたたずまいに小盗見市場やアヘン窟、孤児収容施設、ダンスホールの猥雑さを絡ませ、大連、奉天、ハ爾濱の季節ごとの雰囲気を描かれる。そうした中で、特異性を見せるのが、奉天のホテルに勤務している西原というボーイである。彼は十六歳の美少年で、兵頭の興味を惹く存在である。最後にハ爾濱に出発する兵頭を追って、駅頭に見送りに来た彼を兵頭は抱きしめる。その時の感觸の表現には、微妙な美意識が働いている。わざわざ「美ボーイ」という段をたててのエピソードは、本筋とは関係ないけれども、印象的である。また、とりわけ詳細精密なのが、我善堂、ロスキイ・ドム、二つの孤児収容施設の内情である。これらは兵頭の捨て子捜しのためには避けられないことからではあるけれども、これらの施設について、必要以上に詳しく触れられていることについては、注なぜ満洲なのか、なぜ孤児院なのか、この点について

てはまた別に考える必要があるかも知れない。彼等が織りなす人間模様は、確かに、作者が「満洲にある都会都会の街や小路や悲しい無限の荒野のなかにぼつりぼつりと主要人物の徳義や愛憐の姿を見付け、もろともに運命的臭気を描きはじめた」というにふさわしい内容である。犀星は、満洲という風土に触れて、そこに自分の文学的世界を位置づけた、言い換えれば、時局に即して満洲の人間像を描くのではなく、満洲を自分の文学的環境のほうに引き寄せたということなのだ。

九

この作品の基本的な構成を、これまで見てきた点から整理してみよう。先ず見えてくるのは、藍子を巡る三人の男達の恋愛の行方である。もっとも、すでに藍子には、麴というパトロンがいるから、実質的には、四人の男の物語ということになる。ここに、大陸育ちで、男達を手玉に取るあばずれ女ないしはすれっからしの女という、藍子のイメージが定着する。ところが彼女は、悪女という外面とはことなり内面に純真な心を持つというふう設定されている。これこそ、汚穢の中に生きる「聖処女」である。男遍歴の多様さにもかかわらず、肉体関係にまでは至らせない雰囲気を持つという彼女の位置付けは、一面で都合主義的であるが、これは、新聞連載という制約と同時に、犀星の女性に対する意識のありようとして見過ごすことが出来ない。

彼女を取り巻く四人の男達はどういう存在なのか。石上譲は、彼女の親戚に当たる日本の高官の子弟である。彼は藍子に惹かれて満洲に来るものの、アヘン吸引者となって廃人となり、人生の落伍者となる。日本から渡満する人間像のある一つの形を表しているといえよう。大馬専太郎は、会話の端々にほめかされているように、軍事探偵のよくな日本政府の特殊任務についている、所謂満洲浪人的な雰囲気を持たせさせた、懐の深い人間という設定になっている。一方、宝田欣三、庄屋力三は、満洲を舞台に生計を立てているが、職業から見えてくる

のは、負の世界である。国禁を犯したとして逮捕される麴大三は、そうした闇の世界を代表する存在である。例外は兵頭鑑である。だが、大病院経営者である彼にも、満洲人女性との間に出来た子供を母親共々捨てたという過去がある。彼にとって満洲は贖罪と自己救済のための場所なのである。ここに、早瀬蓼子が絡む。彼女は、大連の場末の飲食店経営者の妹であり、同行した女性達が身を持ち崩して墮落していくのに対して、一人純潔を守ってひたむきに生きる。蓼子のひたむきさに惹かれた庄屋の、意外な恋は、彼女に峻拒されて終わるが、いわば彼女は、知性、教養といううわべの飾りには無縁で、外的環境に左右されない素朴、純真な女性なのだ。そうした関係のなか、兵頭は、全ての過去を明らかにすることによって、周りの人々に受け入れられ自分自身も心理的圧迫から解放される。その結果、藍子を連れて日本に戻ることが可能になった。藍子は、大陸育ちのこれまでの生活を一新、日本的に再生するため日本に渡る。

このように見えてくると、こうした市井の群像の葛藤から浮かび上がってくるのは兵頭鑑と藍子との愛であり、そういう点で犀星が描いたこの物語は、紛れもなく満洲における市井鬼ものということが出来る。特徴的なことは、ヒロインの女性が日本回帰の指向を示したということである。過去を清算し、満洲の風土に触れて再生、自立した男性に導かれて、日本人女性としての枠からはみだした(帰国途中の船内で、二度と東京のごみごみしたところには戻りたくないという感想が述べられている。)生き方をしてきた藍子が伝統的な日本の婦徳のイメージを獲得するという物語は、島木健作を始めとする日本人作家達が取り上げようとした、五族共和、王道楽土のイメージにつながる開拓者達のひたむきな生活などとは全く異なっていることは確かである。だが、そこには犀星一流の時代と関わる女性観、恋愛観が見られることも疑いないことである。

十

ところでこうした男達を巡る女とはどういう存在なのか、女が仕事をするとすることはどういうことなのか、この作品の中で犀星が描いた女の姿は、暗示的である。船中には三種類の女が乗り合わせている。藍子という、大陸育ちで、生活臭のない教養ある美女、場末の飲食店手伝いにむかう三人の女、娼婦として売られてゆく女達である。藍子が石上をはじめ他の一等船客の男性達と、対等な会話を楽しんでいるのに対して、

早瀬苺子は、もとデパートの店員であつた。一見智恵のあらはれてゐない顔立は、臆てその余りにも色の白い点で一層知識的な表情を喪うてゐた。その点では、村山つな子も柔ちゃんにしても同様にモデルや酒場から渡り歩いた、所謂近代都市の裏側に巢喰つてゐる可愛らしいだにや南京虫の類ひだつた。

と紹介される苺子等三人は、知的な雰囲気からほど遠い存在であり、早瀬から、単なる性的関心の対象、誘惑の相手としてみられている。働かなければ生きていけない女が、生活に直面したとき、どうなるのか。こういう境遇の女は、落ちるところまで落ちるといふ前提で、庄屋は女を見ることが分かる。庄屋が引き連れている女達については、「ヘシ潰れた猥褻な内地での使い古しの代物」、「酢蛸同様」の存在として、全く人格を否定されている。同じことは、宝田のもとで働いているロシア人女性についてもいえる。彼女たちの一人は、ロスキイドムに子供を預けているが、宝田は、「この娘達の中に文字を書ける者が五人しかありません、革命前後のどさくさで教育さへ施されなかつたのですよ、極端に無知な女ばかりなんです。」という。だからこそ庄屋の好色のまなざしから逃げようとする苺子の存在が貴重になるわけであり、逆に、単なる火遊びのつもりだった庄屋が、夢中になるという関係の逆転が起きるのである。では、庄屋と早瀬苺子という無

知、無教養な男と女の関係とは異なり、白崎藍子と麴大三、大馬専太郎、兵頭鑑等三人の男の関係はどうなっているか。

船中での彼女は、気品のあるしぐさと美貌で兵頭と大馬の心をとらえる。石上の面前で着替えるチャイナドレス姿も魅力的である。だが彼女は、生活という点では麴大三をパトロンとしている。「乳房火山」五「炯眼」その麴は、「不世出の別嬪」藍子のパトロンであるが、ふだんは彼女に対して、金銭的な援助しかしないという不思議な関係を貫いている。ところが、目の前に現れた石上と庄屋が、藍子と一悶着あつた後、「君は一体何人男を持ってばいいんだ。彼奴はしまひに君を買ひに来るだらうさ。」と藍子をなじり、口論の末とつぜん濡れたタオルで藍子の化粧をぬぐい落とすという動作に出る。「面を剥いだ藍子の顔は黄みのある、いたづらにつるつるした光つた一枚の皮のやうなものだつた。」（同九「鈍」）これが麴の藍子に対する最初で最後の陵辱であつたということだ。藍子の怒りは極限に達し、これを機に縁切り話になる。女性にとって素顔をさらすということが耐え難い屈辱であるという感性が、藍子を支配している。それは分かるが、これは過剰な反応である。だがこの事件があることによつてうわべの飾りの内側にある生身の肉体を男の目にさらさないということが、文字通り、後に、肉体関係はなかつたといいきる藍子の言明の証拠として生きてくる。

素顔を見るところは、兵頭によつても口にされる。「藍子さん！今夜はゆつくり顔を見せて下さい。」（「哈爾濱」三）顔を見せて下さい）夜遅く訪ねた藍子の家の中でいったこの言葉がきっかけになつて、話題は、藍子が有夫か否かということになる。

「主人といへば主人ですけれど、それほど迄に進んでゐなかつたのでございますわ、感情の上ではわたくしを苦しめる権利は、持つてゐたんですけれど、ごめんあそばせ、かういふ言葉づかひを

して、——つまり、身体の上ではそれほどの権利を主張できなかつた方なんですわ。」

また彼女はこうもいつている。

「あの方はいつも愛情を物質の形で現していらしたのですが、私も彼の方がさうなざることを平気でお受けしてました。さうなさりながら彼の方はわたくしをちつと狙つていらつしたのですわ。」

新聞連載ないしは当時の検閲制度の中での、不倫に類する性的な男女関係についての言及がこうした持って回った関係否定の言葉になっているのであろうが、それとともにここには多分に作者自身の女性に素顔、素肌に対するフェチシズムが反映されているといえよう。

彼女の美貌からくる無意識の高慢は、音楽会後の会話の中で大馬によって問題にされる。(同十二「天青地白」)

「あなたが美人だといふ自信を持つてゐられるものを叩きこはして見たいんです。」…中略…

「いや、あなたにはどうかすると惨酷な一面がある、美しい人間だけが振る舞ふ無意識的なハネ方がありますよ。」

追い打ちをかけるように兵頭も、

「藍子さん、男といふものはあなたのやうな、これは皮肉にいふんではないんですが、気高いやうな美人を見ると一度根本から屈辱して見たい野生と、それから無条件に愛敬して見たい気持の二つを持つてゐるものです。」

という。これはおそらく、全ての犀星の作品に共通する意識ということになるのではなからうか。

これをきっかけに彼女はありのままをさらす素直でしおらしい女性に変身する。

一方庄屋の愛を拒絶した葺子の方は、どうなっているのか。庄屋は、

別れるとき無理矢理葺子に、欲得づくでなく愛したという証として、所持金を渡す。「惚れた女に振られても一層よくしてやりたい人情もあるものですよ。」彼女が断ると庄屋は兵頭に分かつてくれるだろうと尋ねる。それを聞いて兵頭は、「折角のものを戴いた方がいいでせう。」と勧める。それをうけて庄屋は、「さう来なくてはいけない。」という。先の麴の例と併せ考えると、犀星には、人を愛するということと、肉体関係を持つということとは必ずしも一致しないという女性哲学があるようで、金は渡すが、肉体は犯さない、あるいは、美しさには惹かれるが、肉体関係を結ぶことは求めないという考え方は、この作品の根幹に関わっているといえるのである。つまり、葺子は無教養破廉恥な庄屋にとって、紛れもない聖女なのだ。無垢の少女に聖性を認めるという点では、石上讓がアヘン窟で出あった少女もそれに当たるだろう。ロスキイ・ドムのロシア人女性の姿にもそうした部分はある。それら全てを含めて犀星の女性意識が作品の人物像に独特の印象を与えている。

十一

この作品には、新聞連載という制約を巡る点での新機軸の試みが見られる。

これまでも見てきたように、この物語の時間は春たけなわの黄海を航行する船中の情景から始まり、零下四十度の冬の哈爾濱で終わる。季節の変化と、大連、奉天、哈爾濱と続く場所の変化が、効果的に物語の展開に彩りを与えているといえる。問題は、この物語がいつの時代のものかということである。兵頭鑑が奉天を訪ねたとき、彼が子供を捨てたのは、十年前の一九二七年八月六日だったとある。ところで、この作品が朝日新聞紙上に連載されたのは、一九三七年(昭和十二)十月十日から十二月十日までであった。ということは、この物語の現在、文字通り新聞の読者が現に生きている時間と密接に結びついて

いるということなのだ。この点について少し詳しく見ておきたい。

第一章「兄弟の帆」の時間は、特定されていないが、春たけなわの季節である。続く第二章「楊柳の都」では、大連港で乗客がそれぞれ別れてゆくとき、ここは、「日本ではもう若葉を着けてゐる季節だの」にここでは刺槐はまだ吹かず、糯米のやうに細かい美しい楊柳の芽が萌え出したばかりであった。「一「埃の虹」とあるが、二「鴉片」では、大連に「大陸の初夏がすでにおとづればじめてゐた」とされていて、葎子の働く店に来た石上の姿が描かれる。その後、浪速町で大馬と石上があつたとき、石上は「僕は三月も前に哈爾濱を飛び出したんです。」（五「被去坊」といっている。一度哈爾濱に落ち着いた石上が、哈爾濱を出奔した後ここに現れたことを考慮すれば、その後、庄屋、葎子、大馬がそれぞれ出会い、哈爾濱に向かう決意をしたときには、大連入港からすくなくとも四ヶ月近くが経過していることになる。

第三章「白夜」は、十年前の記憶の語られる章である。即ち、事件は十年前の一九二七年八月六日に起こつたとされていて、ちょうど同じころ兵頭は奉天の我善堂を訪問していることになっている。すなわち、八月六日である。そして哈爾濱のロスキイドムを訪れたときは、「けふは旗日らしく道路の向側にある満洲中央銀行の牛乳色の建物に日満両国の旗が出てゐて、どこかにつくしこひしの鳴いてゐる声が聞えた」（十二「つくしこひし」とある。何の記念日かは分からないけれども、晩夏の雰囲気である。

第四章「乳房火山」一「松花江の岸べ」の冒頭は、「色の剥けた古燐寸箱をならべて内側から電灯を点けたやうなキタイスカヤの通りは、冴えた秋の夜の侘しい長たらしい街つづきを、膨れ上がつて寒波をたたへる松花江の岸べにまで打抜いてゐた。」と始まる。庄屋は、哈爾濱に来てもう一週間、藍子を探し回つてゐるという。ここには三週間

前庄屋と官憲の手によって日本に強制送還された石上も来ている。九「不世出の別嬪」では麴の悪行が藍子との間で話題になっているが、その時はもう初雪のちらつく季節になっていた。（十四「はつゆき」）そして最後の第五章「哈爾濱」では、大馬によって彼が重大な嫌疑で二三月前に逮捕されたという情報が、兵頭に告げられる。（二「露西亜の姫君」）季節は秋から冬に変わっている。

物語の最後は零下四十度の外気に包まれた厳冬の哈爾濱である。ここでどうしても注意しておきたいことがある。それは、この新聞連載の日付である。十年前の八月六日のことが書かれてた初めての記事は十月三十日の「嬰兒」（「白夜」一）であり、ひぐらしが鳴いていたのは、十一月十一日の「つくしこひし」（同一三）だった。これらの部分は、近い過去のできごととして読むことが出来る。ところが、「松花江の岸べ」（「乳房火山」一）の十一月十三日、「はつゆき」（同十四）の十一月二十六日と続いた後で、二、三ヶ月前の麴の逮捕を語る「露西亜の姫君」（「哈爾濱」二）の十一月二十八日になると、初雪から二、三ヶ月後、すなわち物語の時間は、一気に現在ということになってこざるを得なくなる。以後物語の時間はあたかもアキレスは永遠にカメを追い越すことが出来ないという有名な逆説のように、現実の時間と共にしか進行できなくなつてしまつたのである。言い換えればこの物語は、新聞の発行の日付と同時進行のドラマとなつたということである。

十二

いうまでもないことだが、一九三七年は犀星が満洲旅行を試みた年である。『大陸の琴』の前半は、明らかに犀星が見聞した大連、奉天、哈爾濱の風土が描かれている。だが、季節が進んだ後半部分は、未知の世界を描いているといつてよい。いっぽうこの一九三七年は、盧溝橋事件の起こつた年として知られている。七月七日、北京西南郊外の

盧溝橋で日中双方の衝突が起こり、日中戦争の発端となった事件として後世知られるこの事件は、ちょうどこの物語の進行中に起こった事件であった。新聞社の社告にさえ「事変の渦中にある現在」とある。

ところが、この作品中には、そうした戦争の影を感じさせる部分はない。この点は、大陸を舞台にしながらそうした戦争の世界を全く描いていないとして、犀星の戦争に対する姿勢を云々する際には必ず問題にされる。確かに、この戦争が作品中で話題にされることはない。

物語の冒頭第一章「移花」一「兄弟の帆」で宝田が藍子について「あなたたは事変の時にはまだこればかりのお嬢さんでしたよ。」と語る「事変」とは、一九三一年（昭和六）九月十九日、柳条湖事件をきっかけに日本が中国侵略を本格化した満州事変のことであり、それ以外には全く戦争の気配はないといつてよい。だが、例えば満洲の歴史的な位置づけについては、第四章の「乳房火山」を改題した「五つの国の旗」のようなかたちで登場人物に語らせている。彼が歴史の現実に関心だったということは決してないのである。先に見たように、同時進行の物語という観点から新聞記事と対応させてみると、読者のこの物語に対する姿勢がどのようなものであったか明らかになるだろう。

十三

冒頭に掲げた連載開始のメッセージが掲載されているのは、一九三七年十月六日東京朝日新聞朝刊第十一面、十頁立ての最終頁である。

第二面トップ記事は、「早くも德州南方二里／怒濤の如く黄河涯へ／快速部隊驚異の進撃」という河北、山東戦線からの特派員記事であり、その下には、「碧空に追撃戦展開／洛陽を大空爆／敵爆撃機数台を粉砕」という記事もある。同じ面には、「昨日の戦局展望」とか、「名譽の戦死者」という欄もあり、戦争記事一色である。

メッセージのある同じ第十一面には、軍曹として従軍している新劇俳優友田恭助（本名 伴田五郎）が、子供の写真を胸にして無事でい

るとの上海戦線からの特派員電にたいして、妻の田村秋子が、「まあ写真を」と子供を抱いて喜んでいる写真を友田恭助の顔写真と共に掲げた記事がある。

連載開始第一回の十月十日東京朝日新聞朝刊第一面は、トップに昇曙夢著「謎のロシア」、室伏高信著「謎の国支那の全貌」、後藤朝太郎著「支那の男と女」、次に「日本地名大辞典」、そして「またでた！文藝春秋戦時第三増刊」という七段抜き広告が入る。筆者のなかには、中野正剛、佐野学など著名人の名があるが、文芸欄には、久米正雄、佐藤惣之助、佐藤春夫、佐佐木信綱、与謝野晶子などの名も見える。

第二面トップは、「上海大決戦愈々迫る／一挙敵軍を制圧せん／松井司令官決意表明」であり、「昨日の戦局展望」、「戦局ニュース」、「名譽の戦死者」という常設コラムもある。また、「大陸の琴」が掲載されている第七面には、杉山平助の「支那論策批判（二）」／満鉄と興中公司の進出」等という記事もある。要するに、全紙面戦争記事一色なのである。以後、連載された日々の記事に、戦争についての報道の載らない日はない。物語の中に戦争に触れる部分がなくても、読者は、この作品を間違いなく戦時下の満洲の市井のルポルタージュ、ないしは市民生活の実録として読んでいたに違いない。ここに敢えて戦争についての情報を入れれば、却って嘘くさくあるいはくどくなつて、作品自体が破滅しかねない。戦争の影がないわけではない。例えば、大馬は、作品中で母子等に、軍人か測量師かといわれており、「移花」七「あれかな」、大馬の職業が何かを確信しているという兵頭に問い詰められたときにも、彼はこれ以上自分の仕事のことを尋ねたら二度と会わないと釘を刺す。「白夜」十一「痼」これ以上書けば、おそらく大きな問題になろう。それと対極的な位置にいるのが麴である。彼は闇の世界につながる反政府的な人物という設定になっている。戦時下の軍事探偵と国事犯、実は大馬と麴とは、いかにも時局向きの設定

の人物であり、犀星は犀星流に戦争の文学を書いたということなのだ。^{注5}

十四

先にも述べたように犀星は、一九三七年四月から五月にかけて、満州朝鮮地方を旅行した。

日程は、四月十八日、夜行で東京を出発、^{注6}四月十九日、神戸港から吉林丸に乗船、門司を経て、二十三日大連に着き、二十四日奉天、二十五日哈爾濱到着、二十九日哈爾濱立、三十日奉天に戻り、朝鮮に向う。その後、京城、釜山を経て下関京都を巡り五月七日、帰京というかなりの強行軍であった。

ところで、この旅行については、よく知られているようにすでに『改造』一九三七年二月号発表の評論「実行する文学」の中で予告されていた。

私は凡ゆる意味において時の文芸や社会の批評家ではなく、そして物の理を究める種類の人間ではない、私は何人より黙々たる苦行実践の人間であり所謂小説の刃は血をすすらねばならぬといふ側の男である。私は哈爾濱からチチハル及びそれらの地方を氷雪の融ける季節を待ち受けて出掛けることにしてゐる。その旅行に於ける調査や見学を基礎にしたところの私の今年に於ける最大の仕事は、どの程度まで私の文学使命を完うすることが出来るか、或ひはこれらの使命の中にある我が日本を描き得るかどうかは茲でお喋りするまでではないが、ただ、私は私の文学といふ狭小な天地を叩き破つて広さのある世界に飛び出す熱烈さを持ち、加ふるに文学活動が私といふ小ささに何時までも結び付いてゐるものではないことを証左したい為であつた。同時に凡ゆる文学の中の遅しさは個人的な好みを離れて、もつと世界的な美しい仕事に従事す

べきものであることも、考へたかつたのである。これらの黙々たる私の実行がおこなひ果されれば、纏て私は私の文学も実を結び再び春が来て花が咲くやうになるのである。

私は口先ばかりで文学文学と言つてももうどれだけのことが出来るか危ないものである。ただ、少々良いものが書ければ書ける程度であつて大した芸当が出来るものではない。かういふ私を救ひ、その道を拓いてくれるものは茫々たる満洲に埋れてゐて、私の行き着くのを俟つてゐる私さへ見たことのない私の文学にあるのである。同時に私のものであるが私のほかの時代の空気そのものでもある文学なのである。それらの作品完成は批評家でないところの私の批評品隘でもあり、同時に先刻からお喋りしたところの解らぬ節々も解らせるものであり、いかなる芸術もまた二葉亭のいへるがごとき実行より外にないことを意味するものである。もはや、べちやくちやとお喋りをしてゐる時ではない、何事も実際に行動することより人生の真実はあり得ないのである。私のこれらの小説完成は半年の後であらうが既に一大新聞に拠つて続載されることも決つてゐるから、私の仕事そのものよりも、文学が断ち拓いてゆくべき分野が非常に広大であり、且つ甚だ国家的であることを人々は知るであらうし、追々、それらに就いて些か先覚的であつたものの成績をも見ることが出来るであらうと考へるものである。これらは文学をひろめ高めるものであり、そして文学の偉さも同時に会得すべき数々の人生の細かさをも併せて人々は味読するであらうと考へるのである。

ここに予告された小説が『大陸の琴』であることは言うまでもない。犀星は、この時、時代との関わりを自分の文学そのものとの関係で捕らえなおすと云つてゐるのである。この時犀星は四十八歳、非凡閣版全集十三巻別巻一併せて十四巻の刊行の始まったのは、前年九月、そ

ういう点からいえばこの旅行が行われたのはこれまでの仕事に大きな区切りを付けつつある時であった。ただし、四月十八日の東京出発から五月七日帰京までたかだか二十日間、満洲滞在は二十三日から三十日の八日間に過ぎず、尋ねた土地も大連、奉天、哈爾濱のみである。そこでの経験が、彼の文学的世界にいかほどの影響を与えたかということについて、ここに述べられているような評価が出来るかどうかについては、問題があるといわざるを得ないだろう。とはいえ、満洲の各地に彼が何を期待していたかということでは、孤兒院など訪問先の特異さが注目に値する。普通の日本人観光客は、基本的には日露戦争の戦跡などを主とした行程を組む。明らかに彼は、新聞に掲載される小説を書くための用意をしているからである。

十五

新聞連載という機構を最大限に利用したという点では、先にも見たように犀星の趣向は十分に効果的であったといえるのではないだろうか。だがおおかたの評価は『日本近代文学大辞典』の犀星の項の解説に「一二年四月、朝日新聞の委嘱で、朝鮮満洲旅行を行い、同年一月から『大陸の琴』を『朝日新聞』に連載するが、モチーフは『聖処女』^{注8}などと同じで、白系ロシア人や売国的スパイなどの活躍する非時局的な小説であった。そしてロシア人の住むハルビンのエキゾチズムは犀星の詩心を刺激し、『哈爾濱詩集』(昭三三・七冬至書房)を産ませる。」^{注9}という評価が一般的であり、先に言及した伊藤信吉による『室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家』(集英社)中の『大陸の琴』論も、基本的にはこの枠組みを出ていないと思われる。

伊藤信吉の指摘にもあるように、日本内地に於て喧伝された『大陸の琴』(室生犀星著)などはこの批判を以てすれば一瞥に価せぬ小説ではなからうかと思ふ。畢竟は旅行者の眼である。一月乃至一年の旅行によつて内地の既成

文化人は、敬意と、礼儀を弁へず、満洲の風土について言挙げし、その社会について歪曲した意見を口にす。私等は彼等よりも、少なくとも十年の長であり、五年の先覚者でもあると思ふ。

という、満洲在住の日本人評論家による批評もある。^{注10}犀星の関心が、そういう点にあったかどうかについては即断できないが、先に引用した「実行の文学」を見る限り、犀星の関心はもっと別の所にあるといつてよいだろう。こうした批評については、所謂日本の植民地文学の問題として、厳しい批判にさらされなければならないが、少なくとも満洲在住の日本文学にとっても、この作品が時局的でないこととされていることは注目しておきたい。

十六

戦前、戦時中の犀星の文学的姿勢について論じたものとしては、中野重治の『室生犀星』1「室生犀星人と作品」中「豊熟と途上の障碍」^{注11}「戦争の五年間」が委細を尽くしている。犀星は他の作家の誰彼のように、声高に戦意を鼓吹したり、時局に便乗したりすることはなかったけれども、彼は彼なりに、戦争の文学というものを受け入れ作品も生み出している。だが、世間からは必ずしもそうは受け止められなかったり、資質自身が意図を裏切ったりしているという趣旨は、行き届いた批評といふべきで、富岡多恵子の『近代日本詩人選 室生犀星』^{注12}もおおよそはこの見解を踏襲しているといつてよい。

そうした点に注意しながら、この作品に対するこうした評価が生まれてきたのは、なぜか考えてみたい。端的に言えばそれはこの作品が本来持っていた、満洲を舞台にした日本人の市井鬼ものという点にあることはいうまでもない。犀星時自身は時局に合わせたと思つていたところが、見かけに引かれて評価されていないということである。それとともに、新聞連載から単行本化されることによって形成された本の質にもよるといえる。犀星は、章段名の改訂の外この作品を単行

本化する際、先にも述べたように作品の本質に関わるような改編をしているのである。

それは第五章「哈爾濱」八「別れ」を全面的削除すると同時に最終章に「氷の町」を加筆したことである。「別れ」は、庄屋の愛を振り切って葎子が日本に帰ると宣言した場面がえがかれていた。この場面が削除されたことによって葎子は、非社会的な人物からの愛情を振り切るといふかたちでの受け身の生の選択ではなく、自らの意志で自分の生き方を選択する自由を得ることになった。その結果が最終章に結実する。

「氷の町」の冒頭は、「斉齋哈爾の十一月も終りの頃」と始まる。以前点検した時間の経過からすれば時間設定が多少苦しいといわざるをえないけれども、かといつてさほど不整合になるというわけではない。（ただ、初雪後、二、三ヶ月後が、十一月末というのでは、時間的なつじつまは合わない。未知の風土の季節感を効果的に使いたいという犀星の意図が、新聞連載の執筆時には大きく働いた結果、現実の時間と近づきすぎたということがあったものと思われる。そのため、あえて、こうした設定にしたものであろう。）西洋大街の酒場で、大馬と葎子が向きあっている。彼女は大馬を追ってここまで来たというのである。ここにいつまでもいるわけではないという大馬に、彼女はどこまでもついて行く、いつまでもここで彼の帰りを待っているという。葎子が大馬にとって結婚を前提とするには全く似つかわしくない存在であるというとは、無知、無教養と繰り返し紹介されていることから判断としている。斉齋哈爾で向きあっているとき、大馬の心の中は、

無教養な智恵のすくない女の色の白さは、抜け上るほどびりびりした新しい感じではあつたが、大馬はこの雪深い奥地にまで葎子が自分を考へて遣つて来たことが、さし対になつていても変に

本気になれないやうな不自然さであつた。

と説明される。一方、藍子を兵頭に「おゆづりになりましたのね。」と尋ね、でなかつたらどうなっていたか分らない、今は嫉妬を感じないいい気持ちだ、二人を見に行きたいくらいだという大馬の表情を見て心底から大馬に惹かれた彼女の様子は、「妙な工合になつたものだね。」という大馬の言葉をうけて、

「ええ、とても妙ね。」

葎子は横の方を向いて顔を匿した。いろいろな仕事をし様様な男にも会つて来たのだが、ここまで綺麗によれずに遣つて来たことがなかつた。それが嬉しかつた。

と続く。いつまでも待っているという葎子に大馬は、生活費を渡していつ戻るか分からない旅に出て行く。ここでは、無知な女のひたむきな愛情が、無垢なるが故に男を動かすという、藍子の場合とは正反対の女の姿が造形されたのである。受け身の愛から積極的な行動を伴う愛へ、葎子は、劇的に変身した。これは時代の状況を考へても十分に新しい女性像である。これに伴つてこの作品全体の構想も、相反する生き方を選んだ二人の女の物語という形に整序されたのである。

十七

この改作はどうして起こつたのか。問題はそもそもその構想の在り方である。新聞連載の当初から、葎子は、かつて大馬との接触があつたとされてきた。乗船した船内で大馬を見かけた際の二人の関係を見ればそのことははっきりしている。だが、その関係は、藍子を巡る愛情の葛藤の陰に隠れて、一度も表には出てこなかつた。大馬は藍子の方に関心を示し、無教養な彼女の存在はかえって庄屋の注目するところとなつて、事態は意外な展開を見せたのである。連載中の構想では、愛憎は全て、藍子に収斂していた。アウトローではないが正業に就いているとはいえない、女性を食い物にしている庄屋が、愛の理不尽さ

に悩むという設定は、脇役母子に拒絶されて終わるべきものであった。これはこれで、藍子を巡る男達の物語として完結している。しかし、全体の人間関係の中で、本来の構想では、大馬と母子については連載された形ではなく、改作されたような展開が予定されていた可能性は十分考えられる。入院した母子を大馬が見舞ったという冒頭の設定自体そういうふうに見ても良い節があることはこれまで見てきたところである。ではどうしてそうならなかったのか。それはひとえに物語中の時間と現実の時間が近づきすぎてしまったことにある。時間設定が現実の時間に近づくにつれ、構想の展開が不自由になってゆくことは間違いない。それ故、事態をすっきり整理し、あのようなかたちで物語を終了したということではないだろうか。連載終了後全体の流れを見直し、そこに秘められている事件展開の可能性を取り上げ、改めて構想したのが、二人の男に対する二人の女の愛の物語だったのである。新聞連載時には、藍子の日本回帰という点にのみ焦点が当てられていたのに対して、単行本では、大陸育ちで教養はあるが、多分に制度的な枠を越えた美女藍子が、内地に戻って日本的な女性に生まれ変わるためのドラマと、無教養な庶民階級の女性母子が、大陸に渡り、秘密任務に携わる男にひたむきな愛をささげる姿とが対比的に描かれることになったのである。異郷を舞台に展開される愛の二重奏という構図は、二組の男女それぞれの描き分けによって、新聞連載時とは異なる魅力をこの作品に添えることになった。二人を取りまく男性についても十分時局的な生き方を工夫してあったといえる。特に大馬については戦時下の軍人の特殊任務という重々しさがある。だが改作されて単行本化されたとき、作品は、新聞連載時の紙面構成によってえられた時代性を失う。特に大馬については、孤独に徹して特殊任務に就くという新聞連載時のキャラクターから、ひたすら彼を待ち続ける女がいる(帰る場所がある)という設定になったことで、印象が変わってくる

ることは否めない。かくてこの作品は十分に戦時下の時局を意識した犀星の思惑を越えて、いつもながらの犀星の世界という評価が定着することになった。時間が経てば経つほど、新聞の紙面との相関性は失われる。戦時下という状況に対して、犀星は犀星なりに十分目配りしていたにもかかわらず「避戦」という評価が出てくる原因は、犀星自身の新聞連載に託した構想それ自体の中にあったということである。後年『新潮』一九三八年七月号の特集「国策と文学者の役割」に寄せた「文学は文学の戦場に」の中で、犀星自身、

かういふ事変下にある文学者としての私の心境はどういふふうに変つたであらうか、實際生活の上に何が私を変らせつつあるだらうか、そして私自身の文学がどういふ発展や変化を見せてゐるだらうかを考へる。そして戦線近くに行つて具さに現地報告の文学を目ざすのが文学者として壮烈な仕事であり、何人もさうせねばならぬのであらうか、今事変以来戦場近くに行つた文学者は十数氏をかぞへることが出来るが、帰来これらの文学者は情痴の文学を排し、軟弱なる恋愛小説の出現をいまいましく警戒し、悉く生れ変つたごとく文学精神の女々しさをいまいましてゐた。私はいちいちこれらの言葉を目をすまして聞きいまさら私自身の文学をいかに新しく起用すべきかを深くものしく又悲しく考へ出した。私は先年満洲に赴いた時、何等かの意味に於て日本を新しく考へ、そして別のためになるやうな小説を書きたい願ひを持つて行つたのであるが、結果に於てそんな大それた小説などは書けずに相渝らず私らしい小説を書いて了つた。作家のたましひといふものはどういふ処にゐても、猫の目のいろのやうに変わるものではないのである。

と書いているのは、その辺りの事情を指していると考えてよいのではないだろうか。この旅行によって、犀星が得たものが何であつたかに

ついでには、作品によるしかないが、こうした自己韜晦にもかかわらず、満洲という異郷の風土が犀星に与えた影響は、無視できない。同時期に書かれ随筆集『駱駝行』に収録された諸作品には、その辺りのことから、克明に記されている。異郷の風土が与えた感動は、彼の感性の奥底を揺さぶってやまなかったのだ。その影響は小説よりは詩作に大きかったということではなからうか。後年『哈爾濱詩集』に結実するそうした感興は、すでに『大陸の琴』単行本に、「序に代へる数章の詩」という形で表現されていた。単行本『大陸の琴』は、序の詩とともに読まれるべきものだったのである。

注1 南満中等教育研究会編纂『新撰満洲事情（三訂版）』三省堂、一九三八年五月五日修訂三版発行による。

注2 単行本化するに当たって犀星は、苺子を巡る物語に、作品の本質に関わる改編を施している。簡単にいうと、苺子と大馬との物語が付加されたのであるが、この点については本稿十六参照。

注3 伊藤信吉著『室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家』第二篇『大陸の琴』—菓子捜し・孤児のさすらい。二〇〇三年七月、集英社刊。

注4 どういう訳かこの当時の新聞は、第五面のナンバーがなく、四の次は六となっている。当時、朝刊第一面は全面広告ページとなっており、記事は第二面から始まっていた。ちなみにこの日の第一面は、題字横三段を使つた、「国を憂へ国を愛する者の第一に読むべき書」と言うキャッチコピーのある鷲尾雨工著『普及版吉野朝太平記』以下、理工系参考書、英字のオリエンタルエコノミスト誌、中学講義録と続き、下半分を七段抜きの「オル読み物」十一月特別号広告が占めている。

注5 この問題については、戦後刊行された筑摩版文学全集所収の『大陸の琴』本文に施された改訂が、犀星の意識のありようを物語っていて興味深い。ここでは、第一章「移花」七「あれかな」が、「大商人かな」と変更さ

れている。それに関連して、本文中でも、庄屋力三の、「…前略…測量師かそれとも軍人かな、新京でも見かけたことがあるんですよ、よほど、満洲には明るい人らしい、ひよつとするとあれかな、あれらしいなあ。」という科白の「軍人」という部分が「商人」に置き換えられ、「あれかな、あれらしいなあ」は、「商人でも大商人だな」と換えられている。さらに八「英雄」中、苺子等女性の会話の中でも、「軍人」は「商人」に換えられ、苺子の「だとすると軍服を着ていらつしやるはずよ。」が、「だとするとよほど大商人ね。」となっているし、三人の英雄談義の最後、「あんなふうな得体の分らない人を現代では英雄といふのよ。」／若い桑ちやんがそんな旨いことを言つた。／『また桑ちやんに出し抜かれたわ、さうよ、先づ英雄型にちかいわ。』／『英雄つてものは何処かにほうとしたところのある人に多いわ。』／桑ちやんという子は興に乗つて喋つた。」が全面的に削除されている。こ

こは、戦争を意識して書かれていることを示すものといえよう。

注6 竹村俊郎の日記、及び紫岡亥佐雄宛立原道造書簡によれば、十九日夜、東京駅に見送りに行ったことになる。この旅行の日程は、随筆集『駱駝行』の裏表紙に印刷された自筆メモによつた。

注7 船に乗るといふこともはじめての経験であり、洋服も十八年振りに着たのであつた。…：車から降りると吉林丸の胴体は岸壁に着いてゐて、何時でも乗船できるやうになり、船の中は一杯の客だつた。…：見送人の一人もゐない気軽さに私は船中をぶら付いて見たが、初めて船に乗り込んだやうな気がしなかつた。（『駱駝行』）

注8 文中比較の対象にされている『聖処女』は、「東京朝日新聞」に、昭和十年八月二十三日から十二月二十五日まで連載され、翌年二月、新潮社から出版された、犀星初の新聞連載小説である。この時期犀星は、いわゆる「市井鬼物」創作の時期に続いており、この作品もそうした範疇にはいる。『聖処女』の主人公は、は、カナダ人老女が営むキリスト教系の寄宿舎に育つた、出生に特別な事情がある閃子という美貌の女性であり、作品のモチー

フは彼女が、そこを抜け出たあとのような男性と関わりを持つかという点にある。ところで、この施設は、寄宿舎とはいえず、捨て子あるいは孤児収容施設の趣をもっており、そういう点から観れば、それなりの教育は受けているが、実直な生活感覚からは離れた都市生活者の織りなすドラマということが出来る。なお新潮社版の巻末には、「巻末に」と題する作者のコメントが付されている。それによれば、単行本化するに当たって、作者は、「帆船船館にて」、「悪い歴史」、「正体」、「獺るひと獺られる人」、「場末」、「振子」という章段配列の中で、最終章の「振子」に途中部分十数枚、大尾に三十枚という大幅な書き加えを施した旨の注記がある。

注9 『日本近代文学大辞典』巻三中山和子執筆。

注10 「所謂満洲ものに就いて」『満洲読書新報』一九三八年十一月十五日号
坂井艶司。同文中には、「これらの内地文化人は、その消化不良の認識と旅行者的『眼』によつて文学を安易に生産し、思想的な言動をほしのままにする。」という発言もある。

注11 筑摩叢書一九六八年（昭和四十三）十月刊。これらの初出は、新潮社版『室生犀星全集』第七巻、一九六四年九月、第八巻一九六七年五月それぞれ刊。

注12 一九八二年十二月筑摩書房刊。